

志田房子作 琉球舞踊《鎮魂の詞》の表象

—空間・音・身体の重層性—

波照間 永子（明治大学）

The Ryukyuan Dance *Shizutama no Uta* of Fusako Shida :
Multi-layered use of space, sound, and body

Nagako HATERUMA (Meiji University)

Abstract

The author has been conducting an oral history of women Ryukyuan dancers. This paper focuses on *Shizutama no Uta*, a representative work of Fusako Shida, one of the main subjects of this project, to perform an analysis of the structure of that work. The factors space, sound, and body are used as indices in this analysis. A summary of these factors as they appear in the piece follows.

- 1) Space: *Shizutama no Uta* was dedicated to the Okinawa Peace Memorial Hall on the eve of the Okinawa Memorial Service for All the War Dead in 2000. The Okinawan Peace Prayer Statue, the prototype for which was sculpted by the Japanese artist Shinzan Yamada, stands in the Memorial Hall. *Shizutama no Uta* exploited the awareness of the idea of dedication on display here.
- 2) Sound: Healing music composed by Makiko Hirohashi was used to accompany the dance. The sound of water drops flowing in the first part was overlaid on the sound of the music of the *koto* to produce a memory of the sound experienced during wartime in the trenches or caves. In addition, *guisu* (the words of prayer sung at Okinawan rituals) written by Fusako Shida was read by Sumiko Kitajima, an Okinawan stage actress, to express remembrance of the war dead and hope for peace.
- 3) Body: Several dances featuring the hands were included in the middle and last parts of the performance, over the base tones of techniques of ritual dance handed down in Okinawa since time immemorial, by using the hands of the thousand-armed Kannon and *mudra*-type dances.

In the ongoing oral history of Okinawan dancers, the structure of this work will provide an important perspective on the artistic consideration of Okinawan dancers.

Keywords: Ryukyuan Dance, Creative Dance, Oral History, Work Study, Fusako Shida

1. 目的

2009年、琉球舞踊はその芸術的・歴史的価値および地方的・流派の特性が認められ、国指定重要無形文化財として〈総合認定〉を受けた。歌舞伎舞踊〈1955年各個認定〉および京舞〈2015年各個認定〉と並び、わが国を代表する舞踊芸術に位置づけられている。今では国内外の劇場で盛んに上演され、その華やかさに触れる機会も少なくないが、ここに至る道程は決して平坦なものではなかった。筆者はこれまで「舞踊家オーラル・ヒストリー研究プロジェクト」として、戦前から活躍してきた舞踊家らを対象に聞き取り調査を継続してきた（波照間，2007/2012/2016/2017）（波照間・大城・花城，2012a/2012b）。戦前・戦中・戦後の激動期を生きた舞踊家の足跡を記録し、次世代に残したいと企図したことによる。

本稿は、このプロジェクトの対象者の一人、志田房子（国指定重要無形文化財保持者）の代表作《鎮魂の詞》^{しづたま}に焦点を当て、それが表象する世界観を明らかにすることを目的とする。

2. 舞踊家オーラル・ヒストリー研究における作品

本題に入る前に、オーラル・ヒストリー研究の定義と方法を概観し、本研究の位置づけを行う。オーラル・ヒストリーの概念は未だ定まっていはいないが、「録音をした史料による歴史・社会・文化研究」と捉える狭義の立場と、必ずしも録音を重視しない広義の立場がある^{注1)}。後者の立場では、当事者の語りを聞き取り、その口述性（オーラリティ）の価値を認め、記録・編集・分析したものであれば録音を伴わずともオーラル・ヒストリー研究として位置づけられる。

これまで、琉球舞踊においては、「芸歴書」「芸談」「自叙伝」「伝記」によって、当事者の語りやライフ・ヒストリーが記録され、それをもとに「芸能史」や「舞踊史」が公刊されてきた。その内容を次の4つに整理した。①当事者が自らの生い立ちや芸術思想を著したもの（渡嘉敷，1969/1979）（島袋，1982）（佐藤，1997）（玉城，1999）、②研究者が当事者やその弟子の語りに基づき、裏づけとなる史料も付して実証的に記録したもの（矢野，1974）（大城，1991）、③弟子による当事者の芸歴や芸風の語りを編集したもの（沖縄芸能史研究会，1995）、④当事者自身、研究者、弟子による文書、すなわち第一から第三の史料を編集したもの（真境名由康一人と作品一刊行委員会，1987/1990；新垣松含記念誌編集委員会，2004；渡嘉敷守良記念誌編集委員会，2005；真境名佳子伝刊行委員会編著，2011；高良和子著・仲村致彦編，2005）などである。

ところで、芸能・舞踊等の上演芸術においては、当事者の語りだけでなく、当事者の身体で創り出す「作品」にも、高い価値が内包されていることはいうまでもない。近年の国際的な動向をみると、テキストを用いないパフォーマンスや音楽、口承などもオーラル・ヒストリー研究の射程とされ（酒井，2006：77）、作品および作品に対する作者の語りのアーカイブ化もなされている^{注2)}。

そこで本稿では、以上のようなオーラル・ヒストリー研究の動向を踏まえ、当事者が創りだした「作品」に焦点を当て、それが何を表象するかを分析する。

3. 対象 ―作家と作品―

志田房子（旧姓：根路銘）は1937年那覇に生まれた。3歳より近代の名優、玉城盛重^{たまぐすくせいじゅう}に師事する。沖縄戦で師が他界、その後9名の師^{注3)}から教えを受けた。結婚・子育てを機に上京し、東京を拠点に移すも、沖縄での活動も継続し、2019年3月現在、芸歴79年を迎える（表1）。房子は激動する沖縄を体験し、上京

後は、東京からまなざし続け、折々の想いを託し132もの作品を創作・上演した。

表 1. 志田房子の主な受賞歴

西 暦	事 項
1947年	沖縄民政府文化部芸術課 芸能審査会 資格証明書取得
1985年	沖縄タイムス社芸術選賞大賞受賞（昭和59年度）
1992年	文化庁（平成3年度第42回）芸術選奨舞踊部門 文部大臣賞受賞
2004年	沖縄県文化功労者表彰
2009年	国指定重要無形文化財「琉球舞踊」保持者（総合認定）
2019年	文化庁長官表彰（平成30年度）

ここで取り上げる《鎮魂の詞》は、沖縄サミットが開催された2000年、沖縄全戦没者追悼式前夜祭の日（6月22日）、沖縄平和祈念堂で初奉納された。その後2006年に平和祈念堂にて再奉納、2014年6月には早稲田大学小野講堂の舞台上で初上演、さらに2017年6月開催の「志田房子顕彰公演」（沖縄タイムス社主催）では創作舞踊の代表作の一つとして国立劇場おきなわにて再演した。さらに、2018年10月には、ハワイ沖縄センター^{注4)}にて初の海外上演を、2019年10月には国立劇場（東京・三宅坂）にて再上演を予定している。このことから、本作品は房子の一連の作品の中で極めて重要な位置にあり、上演予定を含む6度の奉納と劇場公演を、沖縄・東京・ハワイの3地点で重ねている。よって、本作品が表象する世界観を明らかにすることは、房子自身の世界観の核たるものが何かを考察する一助になると考える。

4. 《鎮魂の詞》創作の背景

本題に入る前に、《鎮魂の詞》創作の背景について触れておく。沖縄では6月23日は特別な日である。1945年3月末、米軍による沖縄島西の慶良間諸島上陸より地上戦は始まった。約3ヶ月間、日本軍の組織的戦闘が続き6月23日に終結したとされる。犠牲者は軍人と住民あわせて20万余にのぼった。沖縄県は戦後、この日を「慰霊の日」に定め、南部の沖縄戦終焉の地にたつ平和祈念公園にて沖縄全戦没者追悼式を毎年開催している。前日には、平和祈念堂で追悼式前夜祭が開催される。祈念堂には、日本画家、山田真山〔1885-1977〕^{注5)}が、20年余の月日をかけて制作した祈念像が安置され、その像を背景に設けられた特設の所作台で奉納舞踊が上演された。舞台ではなく、祈念堂という特殊な空間で「奉納する」という強い意識を契機に創作が試みられた。

沖縄戦当時、房子は7歳、那覇に住んでいたが、米軍が上陸する前に母の実家のあった中城（中部地域）を經由して、父の実家の在した北部地域に逃げて生き延びた（波照間，2012：64-65）。戦前・戦中・戦後の様々な記憶が房子を本作創作へと導いた。

5. 方法

以上の背景を踏まえ、作品の構成要素を、①空間、②音、③身体に分け、各要素の特性を抽出するとともに、それらがどのように組み合わせられているかを分析した。①～③の3つの要素は、房子の創作プロセス（奉納舞踊の依頼を受けてから完成に至るまでの過程）に、筆者が参与した観察記録に基づき抽出した。な

お、作品分析の対象とした映像は、2000年6月22日の初奉納直前に平和祈念堂で収録したりハーサル映像と、2017年6月に国立劇場おきなわで上演した映像である。また、補足調査として、2017年10月16日、琉球舞踊 重踊流 東京練場にて、創作意図に関する作者への半構造化インタビューを行った。

6. 結果および考察 ―作品分析―

6-1. 空間：平和祈念堂・祈念像^{注6)}

平和祈念像は、高さ12m、幅8mで、一見すると仏像に見えるが、仏像にはない独自性をあわせ持つ。祈念像は人間の祈りの姿を象徴した座像であり、宗教、思想、政治、人種、国境を越え戦没者の追悼と世界平和の希求を「合掌」の形で表している。

像は沖縄の伝統漆工芸技法で作られているが、像と像が安置された空間構造は、作者、真山の壮大な宇宙観が反映されている。像の胎内には国籍、軍人・民間人の区別なく戦没者の名簿が保管されており、台座の火炎模様はマグマを、6つの花卉は6大陸を象徴する。台座の地階には世界各地から寄贈された霊石が展示されている。また像の頭上（祈念堂の天井）には、戦没者の御霊が宿る宇宙空間「群星^{むりふし}」と、世界の7つの海を表す7柱が配されている。

以上のような祈念堂および祈念像の詳細な構造を、房子は事前に知らされなかったが、奉納舞踊の依頼を受けた後、自ら祈念堂を訪れ、その空間の雰囲気を感じ・確認し、創作に着手した。

6-2. 音：選曲・編曲：言葉

近代以後、琉球舞踊の創作は、沖縄の三味線^{さんしん}「三線」を伴奏楽器の中心とした古典音楽や民謡（既存の曲）を選曲し、歌詞をつけるのが通例である。《鎮魂の詞》創作にあたって最も特筆すべき点は、歌・三線を伴わない新たな楽曲を採用した点である。広橋真紀子^{注7)}作曲、Isotonic Sound 癒しの音楽アルバム『Rain ～雨』(Della Inc.)より《Angel's Night》を選曲した。この曲は雨の雫がぼたぼたと落ちる音から始まる。その音が、戦時中に避難していた壕（洞窟）の水滴音に聞こえ心を突き動かされたのだという。その経緯を房子は次のように語った。

平和祈念堂の前夜祭の話をいただいてから、どうしても寝つかれぬ日々が続いた。沖縄戦を体験している私にとっては特別なところだから。安眠のためにと、夫が買ってきてくれた癒しのCDを聴いていると、水滴のボタンボタンという音。あ、これは、あの時の、洞窟^{がま}の中の…。恐怖と悲しさで涙がこみあげた。そして水滴に続く穏やかな調べはグイスを思い起こさせた。奉納舞踊として創作しようと決めた夢の様な音楽との出会いだった。

「グイス」とは、沖縄の祭祀で唱えられる祈りの言葉である。《Angel's Night》の冒頭部分は水滴音から始まる。しばらくするとその水滴音とともに穏やかな旋律が流れ、やがて水滴音が消え旋律のみとなる。その旋律のみとなった部分に十三絃（琉球箏）と十七絃（和箏）の調べを作曲して重ね、演者の「出羽^{んじふあ}」（下手奥から上手前への対角線を歩み出るパート）とした（写真1）。二つの箏はほどなく演奏を終え、再び旋律のみになった後、その上に「グイス」が重ねて朗読される。「グイス」の朗読は、沖縄芝居の役者、北島角子〔1931-2017〕に依頼し元の音源に重ねて収録した。琉球箏と和箏に続き、さらに「グイス」を重ねた点を、房子は次のように述べている。

雨の日の壕の中で水滴の音が心象風景の様に反響する。十三絃の琉球箏で私達の心の叫びを、十七絃の和箏が奏でる太く低い音で母の懐の様に安心出来る空間を表したかった。母が、怖くて泣き出す私

を抱きしめてくれた時のことを思い出す。琉球舞踊の場合、一般的には三線の音に歌詞をのせる。歌と三線は踊りに直結している。《鎮魂の詞》は、祈りが根底にあるので箏と楽曲だけにした。ゲイスについては、私の声は高いためゲイス独特の荘重さに欠けるのではと考えて、北島角子さんに依頼することにした。北島さんは一人芝居などで、戦争の悲惨さや世界平和を訴えてきた人だから祈りがより深く伝えられると思った。

北島角子は沖縄の現代演劇を代表する役者で、戦争体験を沖縄語による一人芝居で表現し、世界平和や命の尊さを県内外に発信し続けた人物である。房子は、1990年2月、東京都立日野台高校において、北島角子と志田房子の会「おきなわの心」と題する学校公演を開催し角子との共演を果たしていた（沖縄タイムス社、2017：113）。その当時から二人は、演劇と舞踊というジャンルの違いはあれども、表現者としての志を共有していたのであろう。

房子は、戦時中、洞窟^{がま}のなかで体験した音の響きと心象を、水滴音に重ねた二種の箏で表すとともに、自ら創ったゲイスによる祈りの言葉を、志を一にする角子の声に託した。演者は静かにその場に座し頭を下げ、その声の響きとともに祈りを捧げる（写真2）。

戦世んしぬじ今年五十五年
上下ん揃て 鎮魂の御願え上ぎやびら

二十万余の御霊ガナシー 島ん人諸人ぬ朝夕ぬ 願えむちえー
只々戦ん無ん 御世ぬ栄えーどうでえーびる

今年辰年え 沖縄島元うて
あひなぬ国々ぬ御方々ゆらて語る御事や 命ど宝
世界ぬ人々ぬ互に手結で
世界平和あらしみていうたびみそうりんでいぬ 願えむちだやびる

今日や鎮魂の歌に三線に踊い うみかきやいびん
どうでいん 心安らかに 御万人の真心
うきといじゅらさしうたびみしえびりウートートゥ

ゲイス：志田房子 2000年作

大意は次の通りである。「沖縄戦が終わり今年で55年。皆で鎮魂の祈りを捧げましょう。二十万余の御霊様、私たちの願いは、戦争の無い平和な世の栄でございます。今年辰年、この沖縄に世界の主要国の代表が集い語くことは“命どう宝” 命の尊さです。世界の人々が互いに手を結び平和であらんことを願います。今日は鎮魂の歌と踊りを捧げます。安らかに私たちの真心を受け取ってください。」ゲイスの朗読が終了すると、演者は立ち上がり元の音源《Angel's Night》を伴奏に祈りの手を主とする舞を始める。

6-3. 身体

振付は5つのパートで構成される（表2）。箏や「ゲイス」を重ねた前段は、房子演じる白髪の神女と他の神女8名が下手奥から上手前方向に進み出て座し祈る①〈ゲイスによる祈りの場〉である。その後立ち上がり②「拝み手」（写真3）、「合掌」をした後、③円陣による祭祀舞踊を舞い、④縦横の直線上に並び「拝み

表2. 《鎮魂の詞》の主な構成

No.	シーン	音楽	舞踊（移動・下肢）	舞踊（上肢「譜語」）
①	神女（一名）の祈り	水滴音		
	若い神女たちの出羽	Mel. (A1)	下手奥より上手前に向い前進	
		Mel. (A2) 箏	↓	
		間奏	↓	
		Mel. (A1)	↓	
		Mel. (A2)	↓	
	グイス	Mel. (B)	上手前向いて座る	
②	冒頭の祈り		立ち上がる	拝み手 合掌（右手→左手）
③	祭祀舞踊〔円陣〕	Mel. (A1)	円の位置に移動 円心向き左に移動	受手 合掌
	祭祀舞踊 〔二列 舞台四隅〕	Mel. (A2)	縦2列の位置に移動 2列のまま外・前・後ろに体の向きをかえる	合掌 受手 合掌 （体側におろす）
	場の転換	Mel. (B)	正面奥から一列になって前進	↓
④	千手観音〔正面〕	Mel. (A1)		手を挙げて千手観音
	観音の手印〔正面〕	Mel. (A2)	左右に分かれて横一列に移動	手印のまま
	観音の手印〔正面〕	Mel. (C)		手印のまま
⑤	祭祀舞踊〔舞台正面〕	Mel. (A1)	後ろへ（左回）	正面向いて拝み手（左手） 拝み手（右手） 拝み手（両手）
	祭祀舞踊 〔観音像 舞台後〕	Mel. (A2)	小走りで祈念像へ 左足横に出し右足かけ 左足を右足にからめて正面に向く 歩み	拝み手 合掌（右手→左手） 右手（手印）→合掌, 左手（手印）→合掌 合掌（両手）
		間奏	一列で一人おきに表裏向く	左右横の人と手を触れる
	祭祀舞踊〔観音像〕	Mel. (A1)	表裏のまま 祈念像はさみ八の字に並ぶ	拝み手（両手） 両手交差（手印） ↓
		Mel. (A2)	片膝立て座り 両膝立て座り、腰をあげる 頭を下げる	拝み手（右手） 拝み手（左手）→コネリ手下ろす コネリ手下ろす（右手） 握り手を胸から頭上に上げ両側に下ろす 合掌→コネリ手→招き手



写真1. 神女たちの登場



写真2. グイスによる祈り



写真3. 拝み手



写真4. 千手観音



写真5. 千手観音



写真6. 観音像に合掌

写真提供：琉球舞踊 重踊流（志田房子顕彰公演、於：国立劇場おきなわ、2017年6月）
平和祈念像の写真を投影

手」から千手観音（写真4・5）、手印の舞を挿入、最後に⑤祈念像に向い八の字になって「拝み手」「コネリ手」「合掌」（写真6）「招き手」で終える。沖縄に古来よりあった手の技法「拝み手」「コネリ手」「合掌」「招き手」や円陣の祭祀舞踊を基調とし、新たに加えた「千手観音の手」や「手印」を導入することで、祈りの対象である観音像に同調するとともに、琉球・沖縄におけるローカルな身体技法のみによらない周辺諸地域にも通じる身体技法を挿入している。

伴奏音楽との関連を見ると、原曲は、主旋律〈Mel.(A1)+(A2)〉、副旋律〈Mel.(B)〉と〈Mel.(C)〉の3種の旋律と間奏で構成されている。シーン③の祭祀舞踊と、シーン④の千手観音・手印の場を除き、主旋律〈Mel.(A)〉では上肢を前腕回外位で前方挙上し戦没者の御霊が宿る「群星」と世界の7つの海に向けて、祈念像を伸びやかに見上げる「拝み手」で貫かれている。作品に多様な手の技法を用いても、同じ旋律では同じ手「拝み手」を反復し強調することで、主題である拝み祈る意図を鮮やかに印象付ける効果をうんでいる。この伸びやかな「拝み手」をめぐって、房子は次のように語っていた。

戦争で亡くなった人の御魂は、仏様になって天上界にいらっしゃるような。そこに向かって奉納する。感謝をこめて奉納する。私は戦争の生き残り。私と同じ位の子たちもいる。自分の生まれた島の、国の文化を知らないままで死んでいった子たちがいっぱいいる。世界中に。だから伝えたい。《鎮魂の詞》で。

7. 結論：空間・音・身体 ―芸術家たちの重なる祈り―

《鎮魂の詞》は、以上のような空間・音・身体 の3要素で構成されている。美術家・山田真山は宇宙のなかにあって「鎮魂と世界平和を希求する人間の理想像」を祈念像に託した。房子はこの空間に響く水滴音と二種の箏によって自らの沖縄戦の記憶を辿り、演劇家・北島角子によるグイス（御願言葉）で戦没者に追悼の意を表しつつ、民族・人種・言語を超越した癒しの音楽に、平和を祈る舞の手を幾重にも重ねて構造化した（図1）。先人の美術家や演劇家の足跡と遺志を踏まえ、今に生きる癒しの音楽に着想を得て、生涯をかけ希求した祈りの心『世界平和への希求』を、舞で顕現しようと試みた。

志田房子作、琉球舞踊《鎮魂の詞》は、「東京で『沖縄の心』を踊り続けてきた志田が、今や人間にとって最も大切なものは何かを、自らの魂に感応する場から発想される表現者になっていた」（勝連、2017：13）との評が顕著に感じられる作品である。

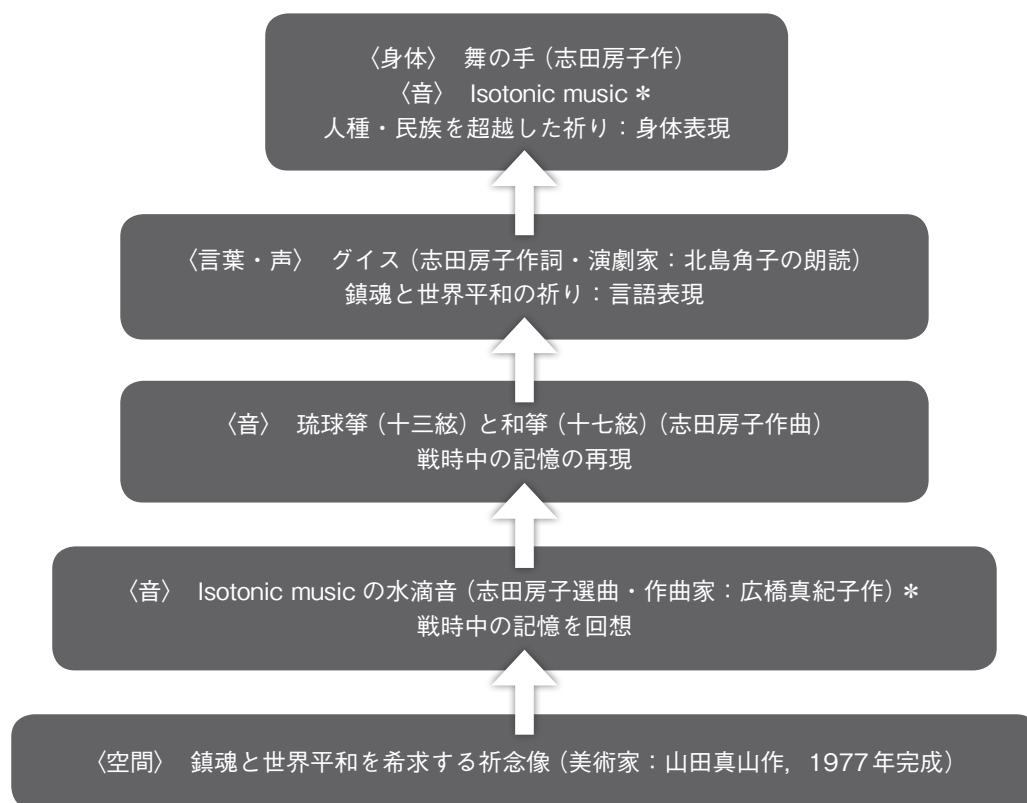


図1. 《鎮魂の詞》の重層性

謝辞

長期間の参与観察および聞き取り調査に快く応じてくださった志田房子氏ならびに貴重な写真をご提供いただきました琉球舞踊 重踊流に謝意を表します。

本研究は、JSPS 科研費 JP17K016463 の助成を受けたものです。

付記

本稿は、2017年11月5日、比較舞踊学会第28回大会（於：with youさいたま 埼玉男女共同参画推進センター）にて口頭発表した内容をまとめたものである。

注

- 注1) 酒井順子は、オーラル・ヒストリーの定義が定かでないことを指摘した上で、歴史学・人類学等における先行研究を踏まえ整理している（酒井、2006：79-81）。
- 注2) 例えばNYPL（New York Public Library）Oral History Projectでは、1974年よりダンサーや振付家の作品に対するインタビュー（映像・音声）をアーカイブ化している（NYPL Website、参照2018/11/2）。その他、WDA-Arts：Korea Digital Archives for the Artsには韓国の演劇・音楽・舞踊等のオーラル・ヒストリーが収録されている（Arko Arts Archive Website、参照2019/3/8）。
- 注3) 仲井真盛良、金武良章、金城宗善、真境名佳子、西平守模、田島清郷、玉城盛義、島袋光裕、新垣義志ら9名の師。
- 注4) オアフ島ワイパフに所在するハワイ沖縄県人会「ハワイ沖縄連合会」（HUOA: Hawaii United Okinawa Association）の拠点。
- 注5) 山田真山：本名 ^{とかしきけんしん} 渡嘉敷兼慎、漢学者渡嘉敷兼礼の五男末子として那覇市に生まれる。彫刻家・日本画家。彫刻を高村光雲と山田泰雲に師事する。後に日本画を小堀鞆音に師事。東京美術学校（現 東京藝術大学）卒（沖縄県立博物館・美術館 Web サイト、参照2019/3/8）。
- 注6) ここで記した平和祈念堂および祈念像の概要は、公益財団法人 沖縄協会「沖縄平和祈念堂 The Okinawa Peace Hall」のWebサイト（参照2017/9/7）を参考にまとめた。
- 注7) 広橋真紀子：新潟県長岡市に生まれる。国立音楽大学作曲学科卒。環境音楽・癒しの音楽の制作を手がける作曲家（Makiko Hirohashi Official Website、参照2018/11/2）。

文献

- 1) 新垣松含記念誌編集委員会編、2004、『梨園の名優新垣松含の世界』、松含流家元 比嘉澄子：那覇
- 2) Arko Arts Archive, “DA-Arts：Korea Digital Archives for the Arts”
<http://www.daarts.or.jp/>（参照2019/3/8）
- 3) 波照間永子、2007、「舞踊家オーラル・ヒストリー——児玉清子の生涯」、『琉球・沖縄研究』、創刊号、早稲田大学 琉球・沖縄研究所：61-88
- 4) 波照間永子、2012、「琉球文化の育む身体世界——志田房子のオーラル・ヒストリー——」、瀬戸邦弘・杉山千鶴・波照間永子他著、『日本人のからだ・再考』、明和出版：東京、59-76
- 5) 波照間永子、2016、「琉球舞踊における『女芸』の成立と展開」、沖縄県教育庁文化財課史料編集班編、『沖縄県史 各論編8 女性史』、沖縄県教育委員会：那覇、190-206
- 6) 波照間永子、2017、「沖縄戦を生きた、舞踊家の心と身体の世界——華やかな舞台に潜む、琉球舞踊の足跡を記録する——」、『伝統と文化』、41号 未来へつなぐSTORY Vol. 6、ポーラ伝統文化振興財団：東京、20-21
- 7) 波照間永子・大城ナミ・花城洋子、2012a、「琉球舞踊における玉城盛重系流会派の系譜」、『比較舞踊研究』、第18巻：9-18
- 8) 波照間永子・大城ナミ・花城洋子、2012b、「琉球舞踊における技法「ガマク入れ」の伝承——玉城盛重系流会派を対象に——」、『比較舞踊研究』、第18巻：19-28
- 9) 勝連繁雄、2017、「演目に添えて」、志田真木・牧志寿子・井口三恵子・波照間永子他編、『志田房子顕彰公演 舞ひとすじ』、沖縄タイムス社：那覇、13、36-37。
- 10) 公益財団法人 沖縄協会、「沖縄平和祈念堂 The Okinawa Peace Hall」
<http://kinendo.okinawayoukai.jp/shisetsu/dounai/index.html>（参照2017/9/7）

- 11) 真境名佳子伝刊行委員会編著, 2011, 『琉球舞踊に生きて 真境名佳子伝』, 沖縄タイムス社: 那覇
- 12) 真境名由康一人と作品一刊行委員会編, 1987・1990, 『真境名由康一人と作品一』(上巻・人物編, 下巻・作品編), 真境名由康生誕 100 年記念事業会「真境名由康一人と作品一」刊行委員会: 那覇
- 13) Makiko Hirohashi Official Website, 「プロフィール」
<http://home.u02.itscom.net/iyasi/index2.html> (参照 2018/11/2)
- 14) NYPL, “NYPL Oral History Project”
<https://www.nypl.org/oral-history-project-dance> (参照 2018/11/2)
- 15) 沖縄芸能史研究会編, 1995, 『琉球芸能の先達 わが師を語る』, 那覇出版社: 那覇
- 16) 沖縄県立博物館・美術館 Website, 「山田真山 作家紹介」
https://okimu.jp/art_museum/artists/1513613324/ (参照 2019/3/8)
- 17) 沖縄タイムス社, 2017, 『志田房子顕彰公演 舞ひとすじ』, 沖縄タイムス社: 那覇
- 18) 大城學, 1991, 「玉城盛義の芸歴と芸風」, 『沖縄県立博物館紀要』, 17, 沖縄県: 65-82
- 19) 酒井順子, 2006, 「イギリスにおけるオーラル・ヒストリーの展開: 個人的ナラティブと主観性を中心に」, 『日本オーラル・ヒストリー研究』, 創刊号, 76-97
- 20) 佐藤太圭子, 1997, 『華の舞ごころ 琉球舞踊に生きて』, 沖縄タイムス社: 那覇
- 21) 島袋光裕, 1982, 『石扇回想録—沖縄芸能物語』, 沖縄タイムス社: 那覇
- 22) 高良和子著・仲村致彦編, 2005, 『琉球舞踊古典女踊りの母—比嘉清子伝—』, 柳清本流和華の会: 浦添
- 23) 玉城節子, 1999, 『翔舞 琉舞に魅せられて』, 沖縄タイムス社: 那覇
- 24) 渡嘉敷守良, 1969, 「芸談、組踊の型」, 三隅治雄編 『沖縄の芸能』, 邦楽と舞踊出版部: 東京, 193-261
- 25) 渡嘉敷守良, 1979, 「自叙伝」, 六世尾上菊五郎著者代表, 『日本の芸談 第四巻 舞踊 邦楽』, 九藝出版: 東京, 281-317
- 26) 渡嘉敷守良記念誌編集委員会編, 2005, 『沖縄演劇界の巨匠 渡嘉敷守良の世界』, 渡嘉敷流守藝の會: 与那原町
- 27) 矢野輝雄, 1974, 『沖縄芸能史話』, 日本放送出版協会: 東京 (1993, 『新訂増補 沖縄芸能史話』 榕樹社: 宜野湾市)